

国内研修提出レポート

8月3日・4日、昨年の現代福祉学部国内研修制度を利用して訪れた、岩手県釜石市松倉町甲子仮設へ赴いた。今回の目的は、前回（昨年冬）の目的である、仮設内で配布する情報紙作成に関して意見をもらうための訪問ではなく、甲子仮設で開催される夏祭りに参加するためであった。前は、仮設でもともと企画された餅つき大会のお手伝いとして参加させてもらった部分が大きかったが、今回は、学生が夏祭りの内容を企画提案するという形であった。甲子仮設の自治会の方の、いつも同じ流れでマンネリ化してしまっている仮設のイベントに新たな風を吹き込んでほしい、との思いから、学生が新鮮な企画を持ち込むことになったのだ。仮設住宅の集約により出ていく人は増えていく一方、入ってくる人はもちろんいない。イベントのマンネリ化に加え、住民の方々は頭では理解していても、心の奥に人が減っていく寂しさが眠っているのだろうと感じた。震災後、それぞれ失ったものがある中で新たにコミュニティを作り、必死に助け合ってきた仲間が減っていくのは、きっと想像するよりもつらいことである。なんとか、夏祭りの日だけでも学生の若い力を感じてもらえればという想いを持って取り組んできた。

準備を始めたのは5月ごろである。昨年の遠野プログラムの活動の一環から派生したこの釜石での活動は、今年度から活動が減少していた「スタ学」の名前を受け継ぎ、継続していくことになっていた。「スタートしよう、東京の学生にできること」。これを省略したものが「スタ学」となるわけである。法政大学現代福祉学部に来ると決意したきっかけになった先輩や、入学してから本当にたくさんお世話になった先輩が関わってきたこの団体を引き継ぐことになって、正直不安の方が大きかった。多くの人に認められ、応援されるような活動にしていけるのか、それは自分たち次第だと分かっているけど、もやもやとした気持ちが渦巻くばかりだった。しかしまずは、少ないメンバーを増やそうと、新1年生への呼びかけに加え、何か被災地に関わろうときっかけを探している上級生への呼びかけも積極的に行った。メンバー勧誘や、定例活動である情報紙発行の準備もあり、夏祭りの準備に取り掛かるのが一足遅れてしまったことは、今回の反省点である。慌ただしく動いていたことは否めない。もう少し時間に余裕を持つべきだったと思う。

新たに仲間になった1年生5人、2年生2人、合計15人で活動していくことになり、さっそく夏祭りの案出しに取り掛かった。様々な案が出る中で、いくつかのグループに分かれ、実現できるかどうか、何がどれくらい必要で予算はどれくらいかかるのかといった詳細を効率的に詰めていった。全員で集まれる時間も限られているため、レジュメにまとめ共有も細かくしていたことはとても良かったことである。

そんな中で、新たに入ってくれたメンバーの想いを甲子仮設の皆さんに知ってもらおうと、また私たち上級生も知りたいという考えから、かまたま新聞として発行することにした。実際に被災地に行ったことがある学生は少なく、いきなり夏休みに仮設住宅に行くよりも、被災地に関わろうとした想いを、文字にし、言葉に代えることで自分自身も再確認

してもらえたらと考えた。そのかまたま新聞を編集してみて、それぞれの学生のきっかけを知ることができ、私自身も、活動する上で大事にしている気持ちを改めて見直すことができた。

本格的に春学期の試験も始まり、集まれる時間も減っていたものの、1人1人の意識の高さで準備を進めることができた。しかし、「釜石よいさ」のことはみんなが心配だったと思う。実は夏祭りの中で、釜石の音頭である釜石よいさを学生が披露すること、そして甲子仮設住宅の歌サークルの皆さんと合唱することになっていた。歌は知っていたものが多く、各個人でも練習できる程度であったが、釜石よいさは誰かと練習した方が良いことは明らかであった。動画サイトで踊り方を見て、何となく動いてみるどころから始まり、住民の方にも踊りが合っているか確認してもらった。最初は、これを住民の皆さんに披露できるのかと心配でたまらなかったが、覚えてしまえば一定のパターンの繰り返しで、仲間と踊るのも、夏祭りで見てもらうのも少し楽しみになっていた。

当日は晴れていたものの雲でかげることもあり、過ごしやすい状態で、夏祭りには最適だった。昨年冬に、餅つき大会で仮設住宅を訪れた時は、予想していた人数よりも多く住民の方々が来てくれた印象だった。今回も同じくらいの人数を期待していたが、仮設住宅を離れていった人が多く、また開催したのが平日であり、勤めに出ている人は参加することができなかつたため、少ししか集まらなかった。それでも、冬に来てくれたことを覚えていてくれた方もおり、嬉しくて目頭が熱くなった。たこ焼き、チョコレートマウンテン(チョコレートが流れ、そこにマシュマロや果物をつけて食べる機械)、射的の用意、休憩所の設置、飾りつけに流しそうめんの手伝いなど、釜石について早々に準備に取り掛かった。

会長の挨拶で夏祭りが始まり、ゆったりとした時間が流れていった。私はたこ焼きを焼いていたのだが、くるくると生地を転がしていると住民の方に「上手上手!」と褒められ、なんだか恥ずかしい気持ちもありながら、とても嬉しかった。成人式もこの1月に終え、完全な意味での「大人」ではないかもしれないが、確実に「子ども」ではなくなったこの年齢で、面と向かって褒められることが日常生活では無くなっていたところに、無防備に、無邪気に飛び込んできた言葉のかたまりだった。ただ褒められただけ、それだけのことが心にじんわりと沁みた。

合唱では住民の方の後ろに学生が並び、「若者たち」「翼をください」「明日があるさ」の3曲を一緒に歌うことができた。住民の方の、力強く、伸びやかな歌声は、誰の胸にも響いたと思う。毎回感動してしまうのは、きっと私だけではないと思う。

その後に学生たちは浴衣に着替え、釜石よいさを披露した。テントの下に住民の方々が座り、その周りを踊りながらまわった。何周かしている内に住民の方がゆっくりと体を動かし始め、リズムにのって踊ってくれた。それだけで、この釜石よいさを練習してきた良かったなと心から感じた。

浴衣を着ることができたということもあり、夏らしさが甲子仮設住宅にも表現できたと

思う。夏まつりの終盤、学生たちが一言ずつ話す機会をもらったが、話を真剣に聴き、頷き、「またおいで」と言ってくれる温かさに、また心をうたれた。

私は昨年の12月に国内研修制度を利用した際の研修レポートで、専門性のない学生にできることはないと感じた、という主旨のことを書いたと記憶している。もちろんその思いは変わっていない。今回また甲子仮設でイベントを企画実行できたからといって、「できること」があったなどとは考えていない。住民の方の笑顔に会いたくて訪れたのであって、力になろうと思っていたわけではない。いい意味で、「被災地」に行くという感覚は無くなってきた。地域を復興させるために頑張っている人のところへ会いに行く、そんな感覚にも近いのかもしれない。あるいは、応援したくて訪れているのかもしれない。いずれにしても、1年生の頃から被災地に関わり続けてきて、見たくとも見えなかったものの輪郭が浮かんできたような気がしている。甲子仮設住宅も来年の夏で集約され、私自身も大学4年生になる。新しくできた後輩に伝えていかなければならないことも増えていく中で、残された時間もいつの間にか減っていく。うまく折り合いをつけてこれからも活動していきたいと思いを新たにしたい。